



山田詠美「海の方の子」について
－題名と位置設定を考慮した読解－

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学釧路校国語科教育研究室 公開日: 2015-05-11 キーワード: 作成者: 谷口, 守 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00008758

山田詠美「海の方の子」について

―題名と位置設定を考慮した読解―

谷 口 守

はじめに

現代の日本社会に生きているのだから、それにより近い小説を高校生が学習する意義があると感じる。しかし、理由は不明だが、それらには教科書から姿を消していくものが多い。中には質の高い教材があるような気がしてならない。

さて、「海の方の子」は、平成元（一九八九）年、『小説現代』十二月号に掲載された山田詠美氏の短編小説である。高等学校国語科の教科書にも採録されて、昨年稿者の勤務校でも教材となった。本稿は、その際使用した『探究 国語総合 現代文・表現編』（桐原書店）をテキストにして、この作品の教材としての価値を考えた。念のため教師用指導資料¹からあらすじを以下に示す。

静岡県の小学校に転校した私は、自分のことを「体の小さな大人」として自負していた。級友の信頼を勝ち得ることに成功した私は、皆から嫌われている哲夫を正しく導きたいという意欲を燃やす。哲夫の家に同行することになった私は、哲夫から悪人だと言われ、さらに哲夫と共に感ずるところによつて、他人から好かれようと努力してきた今までとは違う生き方があることに気づく。また転校するようになった「私」は、悲しみを抑えきれなかった。

一 執筆の動機

はじめでこの文章を見たとき、「海の方の子」という題名に違和感を覚えないだろうか。「海の子」ならば『文部省唱歌』のように、なぜ「方」が入るのか、一読しただけではわかりにくいと思われる。もちろん「海の方の子」とは、登場人物の哲夫を指すということに異論はない。哲夫が「海の方」に住んでいるため、この名が付いたのだろう。が、なぜ哲夫の住所を「海の方」に設定し、主役以外の者の住所を題名にしたのかはわかりにくいと考える。わざわざ題名となるからには、文章全体をまとめる物や事、強調したい思いがそこに表れているはずである。本稿は、このような疑問から端を発し、「題名」や登場人物の位置設定に注意して、よりよい解釈につなげようと考え筆を起すものである。

その際、教科書「学習の手引き 発展6」の、「本文中から『海』につながる表現を抜き出し、それらがどのようなイメージを与えているか、考えてみよう。」という設問にその解明への糸口があると考える。この問いに対する、教師用指導資料の解答・解説には以下のようにある。（傍線稿者）

解答

「そのとき、哲夫くんの運動靴が目に入りました。靴ひもを通す所に、砂がたまってるのがわかりました。」

「すると、西日で金色に染まっているたんぼが、何だか夕方の海のようにな

気がしてきました。涙のせいかもしれません。辺りは、静かに漂う大きな波で満ちてきたような、そんな気がして、私は、小さな声で叫びました。」

「耳の後ろから、砂がこぼれたような気がしました。海の方の子なんだなあ。私は、つくづく、そう思いました。」

静かで落ち着いた雰囲気やおおらかさ、安堵感を与えている。また、海の大きさのイメージが、哲夫の些細なことに、たわらない人間性を象徴しているとも考えられる。

解説

この小説のタイトルが「海の方の子」とあるという点も、重要なポイントであろう。作品全体が海の大きさに彩られ、「(広義の)懐かしさ」のようなものを感じさせるのではないか。常に他者を意識してきた「私」の自意識を変化させたのも、海につながるものであった点を確認する。

この「解説」で注目すべきことは、「常に他者を意識してきた『私』の自意識を変化させたのもこの海につながるものであった」である。この「自意識」の「変化」がクライマックスであり、主役の心情が一番大きく変化した場面であろう。本文の構造を大まかに表せば、左のようになると考えた。

- 1 「私」の人物像
 - 2 「私」から見た哲夫
 - 3 私、哲夫の家
 - 4 「私」の転校
- ↑ 「私」の心情変化クライマックス

この小説でクライマックスは、哲夫の家へ向かう「私」が、刈り入れの終わった、秋の夕方の田んぼで涙を流した際、海辺にいるような気になることで、哲夫に共感し、「誰もが私を好きになること」に向かつて努力しなくても気にしない哲夫と結婚する気がする、という場面であると考える。よってこの小説の主題は、一つには限定できないだろうが、「誰もが私を好きになること」に努力していたが、そうしなくてもよいことに気づく「私」の成長物語と、稿者には捉えられた。「解説」にあるように、その心情変化が「自意識」の「変化」であり、その際、「海につながるもの」や、「海の方の子」(哲夫)が大きく関与している、だからこれが題名となったと言えよう。それでは次に「海の方」とはどういうことか考えてみたい。

二 「私」に対する「海の方」

まず、「方」とは何か。これは左の、「私」の質問に答える哲夫の発言(傍線稿者)にもあるように、「海の方向」と捉えたい。

「ねえ、海の方には住んでるの?」

「違うよ。海は、俺んちよりも、ずっとずっと遠いよ。俺は、海の方に住んでるだけだよ。」

次に、何を起点とした「海の方向」なのだろうか。これは、主人公である「私」と理解したい。すると題名は、「私から見て海の方向の子」、「私よりも海の方に住む哲夫」、つまり「私よりも海の方向に近く位置する哲夫」と解釈できないだろうか。

では、「私」はどこに位置するのか。このことに関して本文の一部を引用する。(傍線稿者)

私は、その年、静岡県の小さな都市に引越しました。そして、すぐに、そこが好きになりました。その土地は、たいそう田舎でしたが、とても美しい自然を持っていました。私は、嫌いという感覚をなまぐさく遠ざけようと努力していたので、どんな土地でも、人でも、好きになれるといえ

ば、そうなのですが。もちろん、小さな頃、生まれ育った東京を時折は、懐かしく思い出しましたが、しようがありません。父を恨むわけにはいきません。

その田舎は、まさに田園という感じでした。見渡す限り水田が広がっていました。その中を三十分以上も歩いて、私や、お友達は、学校に通うのです。私や、一緒に通っているお友達、いわゆる「町」に住んでいました。ここでは、町の子と農家の子は、少し雰囲気が違いました。私は、時折、学校に近い農家の子を少し羨ましく思いましたが、夜、家の中に蛾が入ってくることを聞いて、やはりだめだと思いました。海の方から来る子もいます。彼らは、とても日に焼けていて、男の子などは髪が生え、際に砂をためていました。哲夫くんは、海の方の子でした。

私のように、何度も学校を変わつていくと、その教室で、いったい、誰が好かれているのか、また、誰が忌み嫌われているのが、すぐにわかるようになります。

このことから「東京」で生まれ育った都会っ子の「私」は、「何度も学校を変わつて」、「とても美しい自然を持つた」「静岡の小さな都市に引越してきて、学校では「町の子」として位置していたことがわかる。それに対して「少し雰囲気が違」う「農家の子」が存在し、それは別に「海の方から来る子」がいて、中でも哲夫はわざわざ特別に分けて「海の方の子」と書かれている。このことから都会育ちの「町の子」「私」と、「海の方の子」哲夫の対比、両者の異なる位置設定を読み解くことができるだろう。

余談だが、前述の教師用指導資料の解答・解説にもあつたように、「砂」は、「海」につながる大事な表現だと考える。しかし、右の引用箇所では、哲夫以外の「海の方の子」も「髪が生え際に砂をためていました」と読むことができる。「砂」が「私」と「海」をつなぐ大事な表現だと仮定すると、主題である、「私」を成長させる機会に携わること、何も哲夫でなくても「髪が生え際に砂をためてい

る、哲夫以外の「海の方の子」でも可能だったのでないかと読めないだろうか。稿者は、しばらくこの謎解きに悩みつつ繰り返して読んでいたが、原典である山田詠美氏の『晩年の子供』講談社 一九九四年（所収の「海の方の子」に救われた。なぜならテキストである教科書本文では、原文からの省略があつたからであり、後に教師用指導資料にもこれが書かれていたことを確認した。自分なりの読みをした後で、指導資料を拝読するようにしているため、このような事態に陥つてしまった。

以下は、テキストから欠落した、「私」（久美子）と友達の、哲夫に関する会話の一部である。それを見ていただきたい。（傍線稿者）

「でも、久美子さんは優しいからさ。哲夫つて臭いさ。」

「臭いって？」

「なんとなく。側に寄れば解るよ。それに、あいつ、いつも砂だらけだも」

「だって、海の方の子なんですよ。」

「他の子は、海の方でも、砂なんて付いてないよ。」

稿者は、目から鱗が落ちる思いでこれを読んだ。転校生の「私」からは、「海の方の」「男の子などは」哲夫以外も皆「髪が生え際に砂をためて」るように見えたが、友達によると哲夫以外の子は、「砂なんて付いていない」とのことである。このことから唯一「砂」の付いた哲夫だけが「私」を成長させる機会に携わることができ、そこに他の海の方の子達とは違ふ、哲夫の特異性を見ることができ、そこで他の海の方の子達に対し「臭い」とする表現は、教育上配慮が必要だとその理由で削除されたのだと推測される。それも現代の日本社会ならば致し方ないことなのだろうか。稿者以外の学習者がお悩みにならないことを祈る。

では、都会生まれの町の子「私」は、どういう人物に描かれているか、次でその詳細を見ていきたい。

三 「私」の人物像

本文前半には「私」の人物像が書かれており、その中から「私」の性質をよく表していると思われる箇所を引用する。(傍線稿者)

私は、こまっしやくれていました。今でこそ、そんなふうに顔を赤らめながら、小さな頃の自分を表現することができるのですが、その頃の私には、そんなことは、思いも寄らないことでした。

私は、小さい頃から、人の上に立っている自分というものを感じ続けていました。そして、おろろとなく、人々を愛そうと、その年齢にして決意していたのです。私は、そのとき、まだ、たったの九歳だったと思います。

私は、誰にでも愛されるように、また、誰をも愛すように常に努力している大人だったからなのです。世の中は、悪くない。私は幸せな毎日の中で、もう、すでに、人生を軽く見ていたといえるでしょう。

私は、私でいるということを、常に、ほかの子どもたちに証明し、うそ偽りのなき堂々とした様子で、彼らの信頼を勝ち得ることに成功していました。つまり、私は、彼らより、少しばかり、大人だったのです。

その日、私は、哲夫さんと一緒に学校を出ることに成功しました。私は、下校のときに、彼の肩を、ぽんとたたいて、さも快活なおてんばを装って言いました。

私が、自分でもそうと知っている人の心を和ませる笑顔を彼のためだけに作ってあげるのですが、彼は、びくともしませんでした。

引用文の「私は、こまっしやくれていました」が冒頭である。「こまっしやくれる」とは、「子どもがおとなびたごさかしい言動をする。子どもがませた様子をする。」と辞典にある。はじめに「私」の性質

を端的に述べることで、後の展開を暗示させる効果がある印象的な一文である。本文は、「この「私」を語り手として、「こまっしやくれていた「九歳」の頃を回想しながら進められていく。

「私」とは一体どういう人物なのだろうか。引用文のような思考や行動は、「誰にでも愛されるように、また、誰をも愛す」目的達成のための「努力」が発揮されていた結果なのだろうか。「勝ち得る」「装」う、「作」るとは、何を表しているのだろうか。それらは、この目的を遂行するための意識的行為と考える。更に、小さな子どもならば、威張ったり自慢したりしがちになるだろうが、「私」はおおごことなく振る舞っている。「私」は、九歳の女の子であるが、正に「こまっしやくれて、既に策略、計算に長けた、「大人」じみた人物であったと言えよう。「私」はこのような処世術をいつ、どこで身につけたのだろうか。これに関した箇所を本文から引用する。(傍線稿者)

私は、父の仕事の都合で何度も転校を経験していった。最初は、緊張を繰り返しているだけだった転校も、慣れば、どうということはありません。それどころか、新しい学校に移るたびに、自分に注がれる多くの視線を快感にすら思い始めていました。何度も学校を変わることを、先生方は、気の毒に思っていたのでしよう。私に、必要以上の厚意を下さいました。私は、それを素直に受け取りにこやかに笑いました。人が自分を心配してくれていると気づくことは、とてもなぐ心地よいものでした。私は、何度も、心からの感謝を込めて、お礼の言葉を言いました。そして、不公平にならないように、そのうれしさを、お友達にも分け与えるべく、努力しました。彼らは、私のことを、すくなく好きになりました。だて、子どもつても敏感です。溶け込めないおそりを少しでも見せしてしまう人間には、拒否反応を示すのです。私は、そのことをよく知っていました。私に関しては、いじめられるなら、ということには、あつてはならないのです。だて、私は、誰にでも愛されるように、また、誰をも愛すように常に努力している大人だったからなのです。世の中は、

悪くない。私は幸せな毎日の中で、もう、すでに、人生を軽く見ていたといえるでしょう。

前述したように、「東京」で生まれ育った都会っ子の「私」が、「九歳」迄の間に「何度も転校を経験し」た結果、自分への「厚意」「心配」に「心からの感謝を込めて、お礼の言葉を言い」、「そのうれしさを、お友達にも分け与えること」によって自分のことを「すぐに好きになる」という、人との関係作りの方法をも身につけていったと言えよう。ところが、これらは、「子ども」のように、無意識に相手を思う「純粋な心」で行われていたわけではない。「世の中は、悪くない」と思いつつ、「誰にでも愛されるように、また、誰をも愛すように常に努力している大人」のような意識が「九歳の「私」に既に存在していた」と読み取れる。また、それは、複数の転校を余儀なくされた「私」が、「いじめ」などない人間関係づくりのために身につけた、悲しい術であったのかも知れない。

先に稿者は、「都会育ちの『町の子』『私』と、『海の方の子』『哲夫』の対比、両者の異なる位置設定を読み解くことができるだろう」と書いた。以上のことから考えてみると、計算高い処世術を身につけ、九歳にして大人のような意識を持った都会っ子「私」は、「人為の世界」に位置すると解せないであろうか。

辞典によると、「人為」とは、「天然、自然によって行われるのではなく」人によつてなされること。人の仕業、人の行為」とある。「行為」「所為」「故意」「意図」「恣意」なども考えたが、「人為」が「人」と入るのでよりよいかと稿者なりに考えた。当然哲夫にだつて「人為」はあるだろうが、「私」が他の子どもよりも強い意識を持った振る舞いをしていてという意味で、本稿ではそう使わせていただくことをお許し願いたい。

四 「私」から見た哲夫

では、そんな「私」が哲夫をどのように見ていたか、以下で確認したい。(傍線稿者)

彼それは、私の資料の中で、どのグループにも入ることができない、見放された子どもでした。私は、そのことを何度も確認した後で、哲夫くんに近いこととしました。だって、教室の子どもたち全員に嫌われているなんて、何て不幸なことでしょう。私は、不幸を背負った人間が、教室の隅に、ぼりりとしているのが、耐えられませんでした。私たちは、まだ子どもです。不幸になる義務などないのです。

彼の、その世を捨ててしまったような態度。人の思いやりを、わざとほづけるような意固地な雰囲気。皆、嫌気が差しているのです。それを、彼らは、どんなふうにも説明してよいかわからずにいたのです。

好意を受け取ることはできない人なのだなあ、と、私は残念に思いました。

「だって、あなた、お友達いないし、だから、私だけでも、あなたの気持ちわかってあげられたらいいなあって思ったの。」

「あのねえ、哲夫くん。あなたがって素直じゃないよ。私は、あなたのそういうところを直してあげたいの。」

以上のことより「私」から見た哲夫は、「どのグループにも入ることができ」ず、「教室の子どもたち全員に嫌われ」、「不幸を背負った人間」である、その理由は、哲夫の「世を捨ててしまったような態度」や「人の思いやりを、わざとはねつけるような意固地な雰囲気」にあると解しており、そのため「私だけでも」「気持ち」を「わかってあげたい」、「好意を受け取ることはできない」ところや「素直じゃない」ところを「直してあげたい」と思っていることがわかる。

前述したとおり、「私」は「人為の世界」に位置するとすれば、人を「不幸」と見なしたり、「直してあげたい」と発言したりする、これらの表現の数々には、「私」の、上位から見下ろしたような視線、現代風に言えば「上から視線」を感じないではいられない。よってこの時点で「私」は、「人為の世界」から一方的に哲夫を見ることしかできないでいると解する。その後この見方は、哲夫の家へ同行する中で徐々に変化していく。

五 「私」、哲夫の家へ

続いて「私」が哲夫のことを本当に心配していることを証明するため、哲夫の家へ同行する話が書かれており、その中で位置設定がよく表れていると思われる箇所を引用する。(傍線稿者)

「本当に、私、あなたのことをずっと気にかけてたの。私が、あなたに話しかけなきゃ、絶対にだめだと思ってたの。力になりた、いのよ。」

そう言いながら、私は心地よさに胸が詰まりました。自分の言葉に酔うといふこと。まさに、今が、そうなのだと思惑していました。

「本当に、俺のど心配してんのかよ」

「うん！」

「うそだね。」

「うそじゃない！」

「じゃあ、証明してみろよ。」

「……どうやって。」

「俺んちまで一緒に帰ろう。」

「だろ、哲夫くんち海の方でしょ。すぐ遠いんですよ。」

「でも、俺の力になりたいんだろ。友達いなくてかわいそうな俺のかわいそうな俺の話し相手になろうとしてるんだろ。それとも、珍しがってついてくるだけなのかい？」

「……いいわ。行。哲夫くんちまで歩こう！」

読んでいて不可解なのは、「私」が哲夫の家に行くことが、なぜ「私」の心配が真実であるとの証明になるのか、という点である。しかし、このことも題名を意識し、両者の位置を確認することで読み解くことができる。仮に都会っ子の「私」が「人為の世界」に位置しているならば、「海の方の子」哲夫は、「その対極である「自然界」に位置している」と考えられるだろうか。

当然「私」だって生物であるため、「自然」の一部である。しかし、「私」は、「自然」な振る舞いよりも意図した行為が多く描かれている。また哲夫は、「世を捨ててしまった」かのように人と交流が少なく、その結果必然的に「人為」は少なく、代わりに大自然「海の方」で生活し、一人で「自然」を相手にする時間が長く描かれている。そういう意味で本稿では、「自然界」と使わせていただくことをお許しいただきたい。

すると、「人為の世界」に位置する、東京育ちの九歳の都会っ子「私」が、「自然界」に位置する「海の方」の哲夫の家に行く、俗世間とは異なる「自然界」を知ったり、自然児哲夫に、より多く接したりすることによって、『誰もが私を好きになること』に向かって努力する「必要がないと気づく、そうなれば「人為」が強くなると「素直」に哲夫と接することができる、「人為」が強くなれば「素直」に「本心」から哲夫を「心配」していることの「証明」につながる、と読み解くことができる。

哲夫がこの時このことを意図して「俺んちまで一緒に帰ろう」と発言したかどうかは明らかになつていない。よって、なぜ哲夫は「私」を「俺んちへ」と誘ったのか、という問いの答えはわからない。しかし、「私」が哲夫の家に行くことが、なぜ「私」の心配が真実であるとの証明になるのか、という問いの答えは、両者の位置設定から考えてとても重要であり、主題に行き着くためには、どうしても「私」が「海の方」にある哲夫の家へ行かなければならない根拠が「こ」にあつたと

考える。この後「私」は、哲夫に「俺んちへと導かれていく。次に、哲夫に同行する中で徐々に変化していく」「私」を見ていきたい。(傍線稿者)

その瞬間、私は口もきけなくらいに驚きました。何と、哲夫くんは、そのとんぼの尻尾を、ぱくりと口に入れたのです。とんぼは、諦めているのか、心地よいのか、少し羽を震わせただけで、じっとしていました。

「うめえ。おまえも味見してみろ。」

私は驚いて首を横に振りました。食べちゃうのだろうか。私は恐れたおのいて、彼が閉じた唇にとんぼの尻尾を挟んでいるのを見つめていました。彼は、そのまま、私をじっと見返しました。

「俺、しかもばいもんが好きなんだ。おまさは？」

「甘いもの。」

哲夫くんは、私の答えを無視して、どンドン歩き始めました。私は慌てて、彼の後をついていきました。

「あ、おまえの足の下に蛇潰れて。」

私は悲鳴を上げて飛びのきました。

「うそだよ、今頃の季節に蛇がいるわけじゃないじゃん。ばかだなあ、おまえ。」

私は、悔しさに唇をかみしめ、涙を「じし」とぬぐいました。哲夫くんは、小さな川を飛び越えて、たんぼに、ぼんと降りました。

「じしち来よ。」

私は、助走をつけて、必死に川を飛び越えました。そして、哲夫くんの後をついて、たんぼの中を歩いていきました。

前の引用文で見たように、「素直じゃなく」ところを「直してあげたい」と思って、「不思議な意欲が湧き上が」り哲夫の家へ向かった。「私」だったが、少しづつ哲夫のペースに引き込まれていくのがわかる

だろう。

以下で順に見ていく。哲夫がとんぼの尻尾を口の中に入れたのに対して、「私」は「口もきけなくらいに驚き」、「恐れおののく。哲夫は、「どンドン歩き始めるの」に対して、「私」は「慌てて」「後をついていく。次に、「今頃の季節に蛇がいるわけない」とわかっている哲夫に、いらないはずの「蛇」が「潰れてら」とからかわれ、「悲鳴を上げ」「悔しき」から「涙」を「ぬぐ」う。哲夫が「小さな川を飛び越えて、たんぼに、ぼんと降り」るのに対して、「私」は「助走をつけて、必死に川を飛び越し」、同様に「後をついていく。二人の目的地は「哲夫の家」である。

ここで、哲夫の家に向かう直前に戻って二人の会話を聞いてもらいたい。

そんなもどかしい気持ちが続いているある日のことでした。私は、いつものように、哲夫くんの横を小走りについて歩き、いろいろなことを「それは、主に、自分の家族のことや、それまで移り住んできた土地のことなどで話して話していました。最初彼は聞いていたのか、いないのだから、まったく私を無視していたのですが、突然、立ち止まりました。私は、彼より二、三歩前に歩いてしまった後、驚いて振り返りました。

「何で俺の後、いつもついてくるんだ。」

「後ついてるわけじゃないもん。一緒に途中まで、帰ろうとしてただけだよん。」

この時点で「私」は「哲夫くんの横を」について歩くのであり、「後ついてるわけじゃない」と、哲夫の文句に対して明確に反論し、まだ哲夫ペースに引き込まれていない。ここは「横」にはいるが、「後」ではないとも読める。それがどうして「悔しき」に「涙」を「ぬぐ」うほど、哲夫の「後をついていく」に至ったのか。これも題名を意識し、両者の位置を確認することで読み解くことができると考える。

つまり、「海」から遠く離れた地点では、「私」は自分のペースと自

分の意志で哲夫の「横」を「ついて歩いて」いた、しかし「私」が「海の方」の哲夫の家へ向かうと、そこは異質な世界である「自然界」に足を踏み入れることになり、「自然界」は哲夫の馴染みの世界であるため、「とんぼ」や「蛇」など当然彼のペースになつていき、「私」としては「必死に」後をついていくしかなく、と解釈できないだろうか。特に「とんぼ」を、素手でつかむならばともかく、「口」という、人にとって異物が入ることを最も「恐れ」る場所の一つに自ら入れたことによつて、自然児哲夫が強烈なインパクトで都会人「私」の脳裏に焼き付いたであろう。これ以降「私」は、哲夫に主導権を握られていく。

六 クライマックス

では、いよいよクライマックスに入る。長いが引用させていただきます。

(傍線稿者)

私は、もう哲夫くんなしでは、家に居ることもできないのです。彼から離れることはできませんでした。

わらは西日のせいで、ふかふかと暖かく私たちを迎えてくれました。

おかげで、私の不安も、少し薄れました。

「なーんか、いい気持ち、眠くなりそう。」

「眠ったら、死ぬぞ!!」

「え!!」

「うそだよ。」

私は、がっくりと首を下に向けて、絶望のポーズをとりました。そのとき、哲夫くんの運動靴が目に入りました。靴ひもを通す所に、砂がたまつているのがわかりました。

「ねえ、海で、ぼつととして何を考えるの?」

「教えない。」

「げね。」

「おまえねえ、自分だけ、そういうことを教えてもらえろと思つたら大間違

いだよ。おまえみたいなのと、そ、ほんとは、誰からも、秘密を教えてもらえないんだ。」

「どつして?」

「上の人のふりするのは、一番、悪人なんだよ。」

「私が悪人だつて言いたいのか?」

「まあな。」

私は、何だか、また悲しくなつてきて、ひとしきり泣きました。哲夫くんは、少しも動じることなく、わらを引つて抜いて、結んだり、かじつたりしていました。私は、いつまでも、彼が、私を慰めようとはしないので、あきれて、顔を覆つていた指を広げて、彼の顔を盗み見ました。彼は、私のことなど気に留めていないようでした。ぼつと考えているんだ。私は、そう思い、納得しました。すると、西日で金色に染まつているたんぼが、何だか夕方の海のような気がしてきました。涙のせいかもしれません。辺りは、静かに漂うさざ波で満ちてきたような、そんな気がして、私は、小さな声で叫びました。哲夫くんは我に返つたように、私を見ました。

「どつして?」

「何かねえ、私、海辺にいるような気がなつてたんだよ。」

哲夫くんは、顔をくしゃくしゃにして笑いました。歯が、白いんだなあと私は感じていました。

「な、やっぱ、そう思うな。海、ちゃんと見えるんだよ。」

「うん。」

「俺の目、片方しかないけど、ちゃんと、何でも見えるんだ。」

「うん。」

私は、哲夫くんの横顔をうつそり見つめて、きれいだなあと思いました。見えていない方の瞳は夕日を浴びて、きらきらと輝いていました。耳の後から、砂が、ほれたような気がしました。海の方の子なんだなあ。私は、つくづく、そう思いました。

「私、何か、哲夫くんと結婚するよんな気がするな。」

「ええ?」

私は、自分でもなせ、そんなことを口に出したのかわかりませんでした。ただ、こういう男の子が好きなあと感じたのです。そうして、毎日、ふかふかのわらの山に寄り掛かつて、夕日を浴びて、ぼうつとするのです。「誰もが私を好きになる」ことに向かつて努力することもないので、そんなことをしなくても、私の旦那さんは、気にしないのです。私は、この思いつきに有頂天になりました。

「ねえ、どう思う。結婚するの?」

「知らねえよ。」

「何?」

「俺となんて結婚できないよ。」

「どうしてよ。」

「海の子は苦勞が多いのさ。」

「ふうん。」

私は、少しがっかりした気持ちで、哲夫くんがするように、わらを引っこ抜きました。つまらない気持ちで、いっは、いっは、でした。

「帰ろう。」

突然、哲夫くんは立ち上がりました。

「道、わかんないもん。」

「わかるよ、俺、送ってくから。」

私はしげしげ、立ち上がり、哲夫くんに、わらを払ってもらいました。

私は、そんな彼に笑いかけましたが、彼は怒ったような表情を浮かべたまま、戻りました。

「哲夫くん。」

「何だよ。」

「もつと素直にならなさいよ。」

「うん。」

哲夫くんと私は来た道を引き返し始めました。

前述したように本作品のクライマックスで、哲夫の家へ向かう「私」が、刈り入れの終わった、秋の夕方の田んぼで涙を流した際、「海辺にいるような気」になることで、哲夫に共感し、「誰もが私を好きになること」に向かつて努力しなくても「気にしない」哲夫と結婚するようになる場面である。ここをクライマックスとする理由は、「私」の心情が一番大きく変化するからである。それは、「誰もが私を好きになること」に努力していた「私」が、そうしなくてもよいことに気づくという場面である。では、この一番大事な場面と、題名「海の子」とはどのような関係にあるのか。これも両者の位置設定で考えたい。

初めに、題名に関連したことを確認しておくが、右の引用文で「海」は五回出てくる。それは、私の、「西日で金色に染まつているたんぼが、何だか夕方の海のような気がしてき」という体験と「海辺にいるような気になつた」という発言、「海の子なんだなあ。私は、つくづく、そう思いました」という感想、哲夫の、「海、ちゃんと見えるだろ」、「海の子は苦勞が多いのさ。」の発言である。

「私」の目的は、哲夫の家に行くことであった。その理由は、これまで確認したように、「本心」から哲夫を「心配」していることを「証明」するためであった。

しかし、「私」は哲夫の家には行き着いていない。行き着く前に、「俺ちまで一緒に」行こうと言つた哲夫本人が「帰ろう。」と提案し、「私」も帰宅する。その際、「私」の、「哲夫の家に着いてないから証明になっていない」などの反論はない。目的が果たされていないのに、それで終わるのか、という満たされない思いが学習者や読者に起こるかも知れない。すると、二人の会話上の目的は「哲夫宅訪問」にあるが、実際の目的はそこではないということがわかる。その真の目的とは、「私」の強すぎる「人為」を弱めることであり、そのた

めには、「自然」の最たるものである「海」を体感する必要があったと言えないか。「海」を体感することによって、「人為の世界」にばかり生きてきた「私」に、「自然界」という別の世界もあると、目を開かせる必要があったと言えないか。「自然界を知る」ことによって、世間慣れしすぎたこのままでほろくでもない大人になる、もつと別の生き方があるんだよ、ということと九歳のお嬢さんに知らしめる必要があったと言えないか。

ちなみに、この「目を開かせる」、「知らしめる」の主語は誰であらうか。哲夫なのか、「海の神様」のような存在なのか。稿者は、哲夫とりたい。その根拠として、引用文より前の「本当に、俺のこと心配してんのかよ」「うそだね。」とする哲夫の断言、「俺んちまで一緒に帰ろう」という不可解な提案、また、引用文中の「おまえみたいなやつこそ、ほんととは、誰からも、秘密を教えてもらえないんだ」との、以前からの観察を臆わす発言、「よい人のふりするのは、一番、悪人なんだ」という「私」を見透かしたかのような哲夫の発言が挙げられる。物語の前半には、「私」から見た哲夫が多く書かれていたが、実は哲夫も「私」を観察しており、「私」の「人為」は、哲夫にとつてお見通しだったと解した方が、様々な疑問がスムーズに解かれると思えてならない。すると、「なぜ哲夫は『私』を『俺んち』と誘ったのか」という先の疑問も、「目を開かせ」、「知らしめる」ためであつたと考へることができらう。

話を戻そう。実際に「私」は、「海」どころか哲夫の家にすら行き着いてなく、「海」を直接体感していない。しかし、右の引用文のように、「私」は、「海辺にいるような気」になつた。「海」そのものを見たり、「海」に直に触れたりしていないものの、この後帰ることを考えれば、「私」が「自然界」を知るためには、「この海辺にいるような気」こそが重要であり、これで十分であつたと言えよう。

では、なぜ「私」は、水気が殆ど無いはずの「稲刈りの終わった枯れ

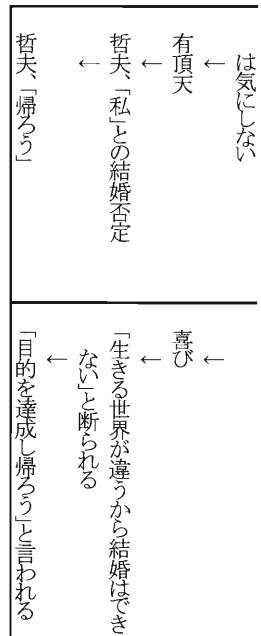
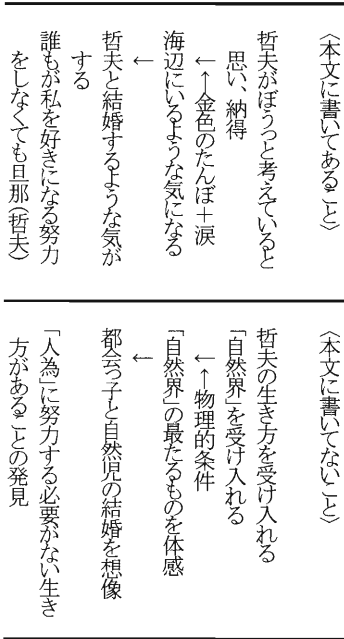
たたんぼ」で「海辺にいるような気」になれたのか。この答えは明らかではないが、「西日で金色に染まっている」「根元を残した稲」がある「たんぼ」と「涙」という物理的条件が偶然重なって「奇跡」が起きたと言えよう。また、ここでの「な。やつぱ、そう思うだろ。海、ちゃんと見えるだろ。」という哲夫の発言から、哲夫もまた似たような条件の下、以前「海」が「見え」ていたことがわかる。哲夫も泣いていたのだらう。

では、なぜ「私」が「海辺にいるような気」になつた後、「私」が「哲夫」と結婚するような気になり、「誰も私を好きになること」に向かつて努力することもない」と気づくに至つたのか。この答えもはつきりと書かれていないが、「海辺にいるような気」になる直前に、泣いていた「私」が哲夫を「盗み見ると、哲夫は、『私』のことなど気にも留めず、『ぼうつと考えている』ように、『私』は『思い、納得』する。この、人のことは『気にも留めず、自分は自分で』ぼうつと考へる哲夫の生き方が、「人為の世界」にはない新鮮な生き方として「私」の目に映つたのではないか。あらためて辞典で「納得」を見ると、「他人の考え、行動などを理解して受け入れること」とある。「私」が、他人のことを「気にも留めない新しい生き方を受け入れ、『誰もが私を好きになること』に向かつて努力をしなくても、こんな生き方をする哲夫ならば『気にしない』と気づくこと」によって、「有頂天」になるほど喜び、哲夫との「結婚」までも口にするに至つたと考へられる。

先の、なぜ「私」は、「たんぼ」で「海辺にいるような気」になれたのかという疑問の答えは、物理的条件での偶然以外はわからない。ただ、右のように考へると、哲夫の生き方を受け入れた結果「海」が見えた、つまり、「自然界」を受け入れた結果「自然界」の最たるものである「海」が見えたという象徴的出来事につながつたと捉えられな

この後「私」の結婚の「思いつき」は、哲夫に「俺となんて結婚できないよ。」と否定される。これは、一般的な男の子の、照れくささの表れであろう。しかし、気を付けたいのは、哲夫がその理由として「海の方の子は苦勞が多いのさ。」と言う点だ。普通の九歳の男の子が結婚を否定する際、こんな断り方をするだろうか。稿者は違和感を覚えたが、これも位置設定で考えれば、「人為の世界」や都会に比べて、「自然界」で生きることは苦勞が多い、つまり、「お前と俺とは生きる世界が違うから結婚できない」と解せないであろうか。哲夫なりの照れくささと思ひやりを込めての断り方であったのかも知れない。

そして前述したように、引用文最後の、哲夫から「帰ろう」と言う提案に至り、「私」の異界訪問は終了する。これも、哲夫側からすると、「私」が「自然界」を体感し、異なる生き方があることを知ったのだから目的は達成した、これ以上「私」が「自然界」にいる必要はないと判断した提案だと理解できる。これらのことを図にすると、左のようにになると考える。



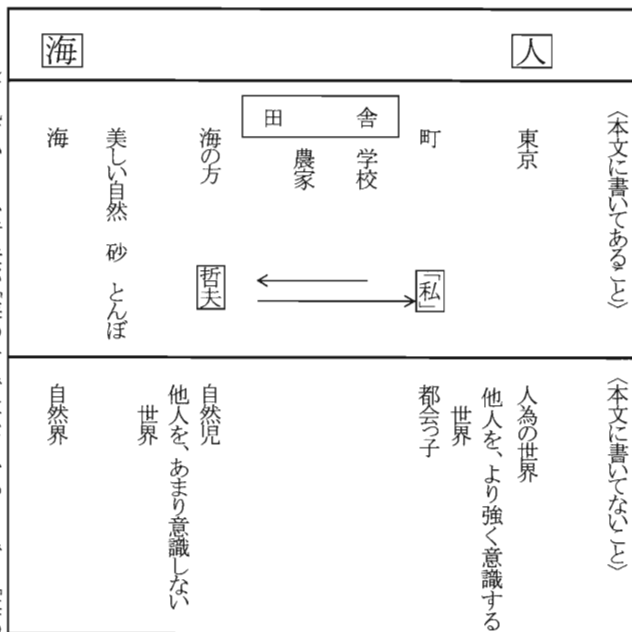
七 「私」の転校

さて、「自然界」を垣間見て、自分とは異なる世界の存在を体感した「私」だったが、それを教え、「こういふ男の子が好きだなあと感じ」させた哲夫との日々を終止符を打つときが来る。本文の終わりを左に引用する。(傍線稿者)

年も暮れ、二学期も終わりに近づく頃、父は、私に、三学期は別な学校で過ごすことにならうと告げました。私は衝撃で口もきけませんでした。母は、父の栄転とやらをとっても喜んで、私に伝えましたが、私は鼻白むばかりでした。私は、もうすでに、この田舎町が大好きになっていたのです。

終業式の日には先生が教室のお友達にそのことを伝えました。誰もが驚き、そして「うそでしょ」と泣きたす人たちが続出しました。私のいつものやり方は、ここでも成功していたようです。皆、私のことを、本気で慕っていたのです。私は、教壇に立ち、泣いている彼らを眺めまわす。すると、私の瞳からも涙が噴き出してきました。後から後から湧いてくる涙は、けれども、皆のためのものではありませんでした。私は、哲夫くんを見ていました。彼は、泣かずに唇をかみしめて、私をにらんでいました。私は、大量の涙をぬぐうこともしなかつたので、それは、だらだらと口の中に流れ込んでいきました。しよばいも私が好きなんだ。私は、無然と

校から哲夫の家の方向に同行して、帰宅したことを示す。



こうして見ていくと、哲夫が「海の子」ではなく、あくまでも「海の方の子」であり、「私よりも海の方に近く位置する哲夫であることがわかる。さすがの自然児哲夫と言えども、「人間」なので「海」と同等にはなれない。また、本稿冒頭の、「海の方の子」という題名に対する「違和感」もすつきりと解消されるだろう。すると、

「ねえ、海のそばに住んでいるの？」

「違うよ。海は俺んちよりもずっとずっと遠いよ。俺は、海の方に住んでいるだけだよ。」

という会話の意味も理解できるのではないかな。

九 結語

「海の方の子」というタイトルに疑問を持ち、「私」と哲夫の設定位置に注意してみた。そこで、本文をもとに、都会生まれの「私」が「人為の世界」に、「海の方」に住む哲夫が「自然界」に位置するという対比で読み解いてみた。すると、それまでの疑問が嘘のように明らかになった。恣意的な読みならぬように、「自戒」のつもりで常に根拠をもとに考えてきたつもりだ。が、「解釈」である以上は、御異論がある方もいらっしやるかも知れない。その際は他の生き方を受け入れた「私」のように、素直に耳を傾けるので、是非ご指導願いたい。

ただ、稿者の中で、すべての疑問が解明されたわけではなく、また、読めば読むほど別の解釈もできるかと悩まされ、それは現在も続いている。「高い価値のある教材」という定義づけはなかなか難しいだろうが、その一つに、様々な読み解くことができる作品が挙げられるのではないかな。そういう意味でこの「海の方の子」は、教材として高い価値があると考える。

注

- 『探究国語総合【指導資料】第二分冊 現代文編②』
（亀井秀夫・中野幸一ほか ビアンソン桐原 平成25年）
- 『日本国語大辞典』
（日本国語大辞典刊行会 小学館 昭和50年）

（たにぐちまもる／北海道札幌啓成高等学校教諭）